

立場を越えて、話す「じ」から、はじめ「じ」 〜とみおか子ども未来ネットワークの活動〜

福島県双葉郡富岡町は、東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響により、今も町全域が警戒区域に指定されている。住むことはもとより、自分のまちに自由に入ったりすることもできない。現在、約1万4000人の町民は、全国47都道府県に分かれての生活を余儀なくされている（2013年1月末）。

とみおか子ども未来ネットワーク（ITCF）は、昨年の2月11日に富岡町民の有志により設立された。誰がどこに避難しているのか、把握することもままならない中、少ない手段を使って町民に集まること呼びかけた。しかし、当初はそれに応えた人はいなかった。それでも、福島・いわき市、埼玉、栃木、静岡と開催地を変えながら活動を続け、時には30名ほどが集まるようになった。タウンミーティングと呼ばれる会合は、町民だけが参加するクロージ会議、町民以外の人も参加できるオープン会議とに時間帯を分けて開かれる。各地にいる町民が、富岡町のこれからについて、もう一度、気持ちをひとつにして対話のできる場をつくることが目的だ。

このとみおか子ども未来ネットワークの発起人のひとり、市村高志さんにお話をうかがった。

このままでは子どもたちに富岡町を残せない

311の事故直後、私たちは何も知らされないなかで、避難しました。危険だからとにかく逃げなさいと言われて、着の身着のまま、3〜4日で帰るつもりで町を出ました。まさか爆発が起きて、しかも帰れなくなるなんて、考えもつきませんでした。

富岡町は、東電に勤める世帯も多く、原子力発電所（＝原発）と町民の生活が、密な関係にあります。

小学校の社会科見学で原発を訪れたり、子どもでもその発電システムを知っています。『原子力の安全神話』の中で50年間、過ごしてきたわけですから、この現状をどう考えればいいのか、何で今、自分たちがここにいいのか、気持ちの整理をするの

に、とても時間がかかりました。

その年の夏、仲間と話したんです。それだけに、子どものことには心を痛めていたんです。特に2つの点でした。一つ目は健康のことです。これは、その子の孫子まで何代も続くかもしれない問題です。そして、故郷富岡町のこと、このまま町を無くしてもいいのだろうか？と考えています。土地がきれいに



福島第一原子力発電所半径 20km 圏内の安全・治安を確保するため、原子力災害対策本部長たる内閣総理大臣が関係市町村長に対し、避難指示区域を警戒区域に設定することを指示した（図、解説とも経済産業省ウェブサイトより引用・抜粋）。



市村高志さん。震災後3月17日に東京の親戚宅に避難をして、4月1日から足立区で避難生活を送っている。

なるまで何年の歳月が費やされるかわからない、その頃に私たちは生きてはいない。今、黙って指をくわえてみていたら、子どもになんて言われるのだろうか？ 何でもつと深く考えなかったのか？ とは、思われたくない。ありがとうなんて言ってもらえないかもしれないけれど、とりあえず、ここまではやったよと言えるようにしようと話しました。故郷を残したい、仮に土地がなくなつたって、自分の子どもに「富岡の子どもだったよ」とどうやって伝えられるか、そんな想いがありました。

正しく理解されない、町民の思い

散り散りバラバラになった町民は、これから先が見えずに悩んでいます。個人情報扱いの方が壁になって、居所のわからない人もいます。町民のなかには東電関係者がいて、彼

らは被害者だけでなく当事者にもなってしまう。自然災害だけではないところがあって、町民同士でも立場が違っていると、一緒に話すのがすごく難しいんです。

とにかく、富岡町についての情報が直接入らなくて、大半の町民はテレビや新聞で知るしかありません。あの人が、あの専門家が、こう言ったとか、これからの指針がこう決まったとか、報道によって聞かされる。私たちの真意が伝わらないまま、私たちとは無関係なところで、町や生活のことが決まっていくことに対しては憤りを感じます。

親を心配させないがために、頑張る子どもたち

子どもたちは、「ここ（避難先）に来たくなかった」と言いたいけれど、それは親のせいじゃないということをよくわかっていきます。親には言えない苦しみをもったまま、屈折した状況のなかで過ごしているんです。明るく振る舞っている子ほど、きついんじゃないかな。

一方、親は子どもを叱れなくなっています。子どもが行きたかった学校に行けなくなったり、仲のよい子と離ればなれにされ、友達づくりに悩む姿を見たり、子どもがどれだけ我慢をしているのかを知っていますから。こうした子どもの問題は、これから先、年数が経

てば経つほど、学校や仕事とのかねあいが出てきて、ますます身動きがとれなくなると危惧しています。

これから先、町民をつなぐのがTCFの役割

富岡町をどうしていくのか、健康への不安をどう解消していくのか、それから賠償責任の問題があります。当事者は生活再建に向けて、各家庭、個人は日々戦っています。私たち町民がバラバラでは、疲弊が進むだけだと感じます。だから、町民をつないでいくのが私たちの仕事と考え、まずは、みんながしっかりしゃべることが大切なのだと思います。「また、しゃべりさ行くべ、のみさ行くべ」と輪ができれば、それでいいと思うのです。

それが、これからの大きな糧となり、前を向いて人生を歩む一歩となればよいと考えています。

取材／編集部

市村高志（いちむら・たかし）
とみおか子ども未来ネットワーク代表
元富岡第二小学校PTA会長

とみおか
子ども未来
ネットワーク

<http://www.t-c-f.net/>
e-mail: info@t-c-f.net